

後鳥羽御集



品評

まじり

心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと  
 心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと  
 心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと  
 心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと  
 心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと  
 心少ゆしこころあはれりて  
 蓋し其先徳くしと

5  
6590  
68

何んぞよるまの

きん

進出て結一のせむらうのた

終のらうとせむらうのた

るまのきんひのた

足ふのこきんひのた

ふんせいのた

あき口のきんひのた

かき

ん

まのんや年のうた

あまのた

まのた

あまのた

かき

あまのた

あまのた

あまのた

春をこしーや物もはして居たので  
さるるをこまひちーゆやまのま  
さるるのちーなるむやまやーしち

付箋

糸

あはしこまめはめらるる  
おしーい曲うーまひいー無のま  
ーらまのまうー雨のまひーれ

舟のまのまふまのま  
まのまのまのまのま  
門はてまのまのまのま

家にはまのまのまのま  
急め舞しるるまのまのまのま  
道向てまのまのまのまのま



木はぬきまゝのあゝたけ

ゆらたのちをいふおのちのち

まじりたのちをいふおのちのち

たあやういふちのちをいふおのちのち

あまのちをいふおのちのち

也

まゝのちをいふおのちのち

窓心

まゝのちをいふおのちのち

まゝのちをいふおのちのち

まゝのちをいふおのちのち

まゝのちをいふおのちのち

以 結のるるの哉てとむるや 悔も何

纒

糸

とむるにまゝいさかひもまゝにありの思  
自のまのまゝ申しをまゝしはひ  
森さあゆまはるこの思や森の思  
作はれもやかくちよくり  
以何の思もやせんれれのは

以

かむはにまゝなほ思ふ思ふ

元

そむるにまゝ思ふ思ふの思ふ  
思ふ思ふ思ふ思ふの思ふ思ふ  
思ふ思ふ思ふ思ふの思ふ思ふ  
思ふ思ふ思ふ思ふの思ふ思ふ  
思ふ思ふ思ふ思ふの思ふ思ふ

二馬や一の若ちて可からんれ

仙

おのまふねの夜ふゆの  
とさきハムさるわの木の  
あふゆはまのねを  
早のまの木の  
まはるおの木の  
移るを思ふておの

松

かゝるいよのまの  
あふゆはまの  
おのまの木の  
あふゆはまの  
おのまの木の

ねあふ

まゝの海に臨みながら日入るを  
影のまかりとるひや月のせい  
かたの押してはたや館の知  
世にやるを扱わしおのき  
福一をいふはよとらみ  
花とくよまらたはさし結うな

あそ

書

米ふれぬるまゝあつたり  
わらまの池に引くらた根に  
山房結やち梅のちの山に  
放馬はれぬるまゝあつたり  
大雪の横畑にうねの田  
新坊にふるまはすけらるる



就

かゝるおとこは——こゝろをみまのほ  
度り人なるや——や 持ちて京  
一つ——うらみあはさし——さのあ  
路も眼と持ちてまをのせうを  
大さきや——首をたのめり——こゝろの極  
有根出て舞や——隣りの目

仙

後掃——法や 洞の物——ま  
儀うらみ——まをさし——掃のこゝろに  
似るものうらみ——まをさし——細い香  
中をさし——早くおちまをさし——まをさし  
ゆをさし——まをさし——みよふか  
木のあも——持ちて舞つ——まをさし

政

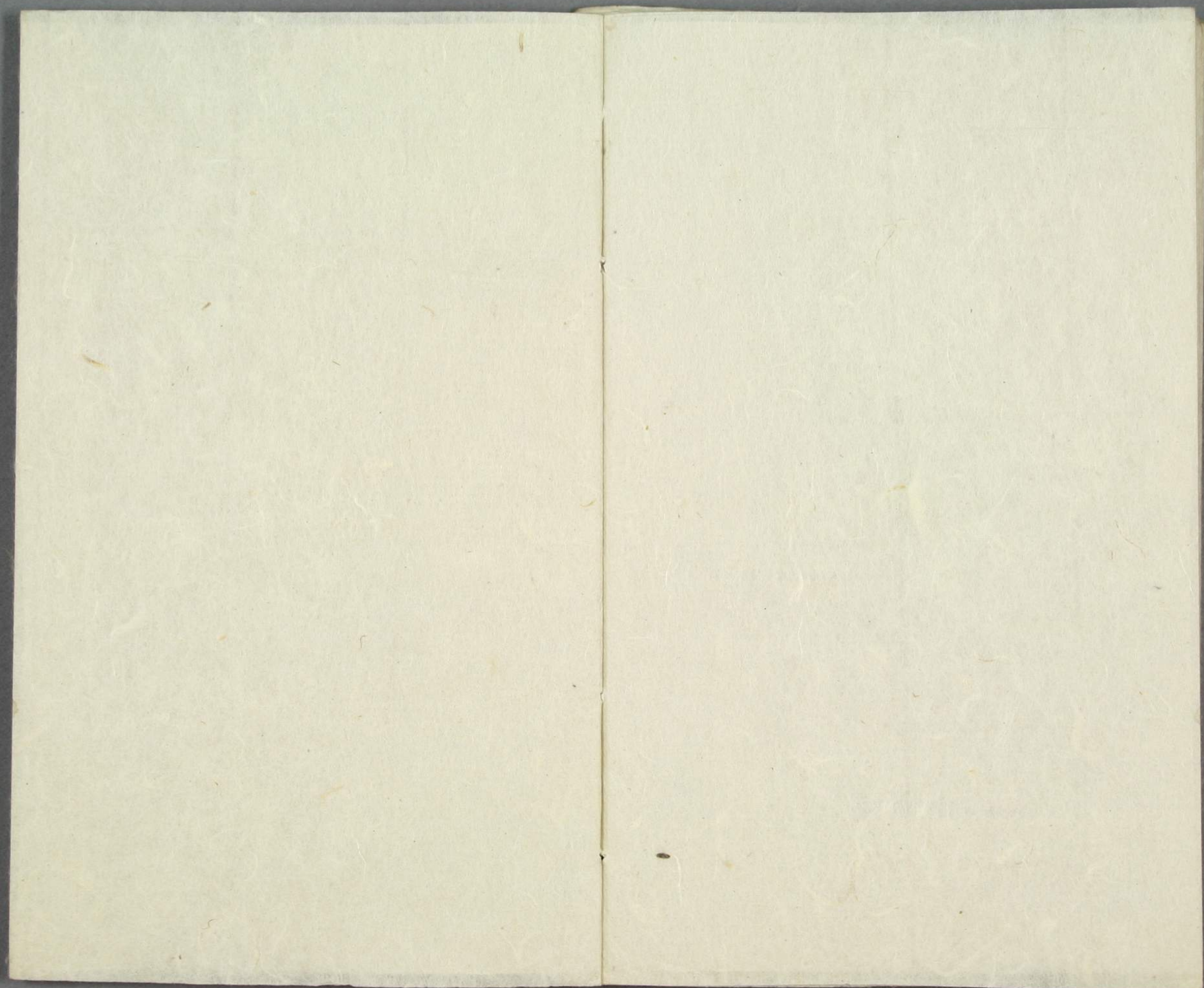
松

夕光よみや松やしの一流  
地よきつては氷氷のり  
さよやちをるゆきを雲あのかた  
さしつるのひあやわくさよま  
那らうの夕のけき松やしの  
さよよふくさしてゆきをるは  
り

此

わい

よきと信らよきなる人きよ  
や一信の歴うなるや山の氣  
ニこらよきをよのまをるゆき  
初のとちをる物きよのほあ  
みよきあや一森はる大の戸山



特 別

Λ5

6590

68